

仙台市立 柳生小学校「みんなで創ろう!柳生キッズファーム」(平成14~15年度)

<p>教育の対象者 小学5年生全員(2002年度) 小学6年生全員(2003年度)</p> <p>教育の実施者 仙台市立柳生小学校</p> <p>教育プログラムの企画者 小学5年生担任(2002年度) 小学6年生担任(2003年度)</p>
<p>教育プログラム企画の背景・経緯 2002年度まで校長だった初代校長 渡邊忠彦 氏の方針に立ち、「未来を拓く生きる力のある子ども」「地域とともに成長する学校」を目標としてきた。そこで、正課の時間だけでなく、生涯学習として余暇の時間に子どもを育てすためのシステムが検討されていた。 2000年度2学期に「総合的な学習の時間」の導入に対応して学校に協力することになっていたボランティアから、授業以外の時間でも指導可能との申し出を受け、教員を含むボランティア講師の活用による子ども向け生涯学習講座として、「柳生子ども塾」が開設された。 2001年度から「柳生子ども塾」のカリキュラムの1つ、“子どもの力を育てる学習”領域の新規講座として、起業教育「柳生小バーチャルカンパニー」が実施された。 2002年度からは、その経験を生かして、正課でアントレプレナーシップ教育に取り組んでいる。</p> <p>教育プログラムの目標 本取組を通じて育てたい4つの力として、以下の4つがあげられている。 意欲関心を持って課題に取り組もうとする力 課題をさまざまな角度から追求し解決する力 調べたことを自分なりに工夫して表現する力 学習したことを実践する力</p> <p>教育プログラムの目的 原材料の生産、商品開発、販売体験などを通じて、創造性、チャレンジ精神、問題解決力などのある児童の育成 IT活用能力の向上 日常の教科学習の活用 収益で社会貢献を学ぶ。</p>
<p>教育プログラムの内容 実施期間・回数・頻度・延べ時間 ・2002年4月から「総合的な学習の時間」の中で全90時間実施 ・2003年4月から「総合的な学習の時間」の中で実施</p> <p>実施場所 ・教室内、体育館、農園、販売場所(太白区役所前広場、一番町三丁目商店街)</p> <p>対象者の人数規模 ・小学5年生4クラス125名(男女はほぼ同数)(2002年度) ・小学6年生4クラス123名(男女はほぼ同数)(2003年度)</p> <p>プログラムの内容 ・柳生和紙の原料、ハーブ、稲などを育て、農業体験を行うとともに、数名ずつに分かれて、会社を設立し、商品を開発し販売した。また、キッズファームのマークを作成したり、会社ごとにホームページを作成した。 ・販売する商品の選定に際しては、商品審査会を2回開催し、コストパフォーマンス</p>

<p>と魅力度について、互いに評価しあい、商品の絞り込みを行った。特に、2回目は子ども達の親や仙台市教育委員会などの外部関係者も交えて実施した。</p> <ul style="list-style-type: none">・2002年度は、販売体験は2回実践した。10月20日の「太白区民まつり」は課外活動として、希望者のみ参加した。この経験を踏まえて、11月23日の「一番町三丁目まちづくり実験事業」での販売実践は、授業時間内の活動(校外活動)として、全員が参加した。一番町での販売実践における利益は、半分を資金難に悩む地域のイベント「光のページェント」に寄付し、残りの半分は、クラスごとに話し合って社会貢献の目的に使用することとした。・課外活動は、放課後、希望者のみが参加して実施した。・2003年度は、12月14日に仙台市一番町商店街において販売実践をおこない、収益をアフリカの子ども達のために寄付した。・また、2003年度は、開発した商品を東北経済産業局主催の「小中学生発明王コンテスト」に出品した。
<p>講師</p> <ul style="list-style-type: none">・(2002年度)小学5年生担任 小熊 信治 氏 高久 由佳 氏 朝倉 浩一 氏 佐藤 哲也 氏・(2003年度)小学6年生担任 小熊 信治 氏ほか3名・(2003年度)宮城県産業デザイン交流協議会(MIDEC) 佐藤 和子 氏 商品のデザインについて指導をおこなった。
<p>使用教材</p> <ul style="list-style-type: none">・特になし
<p>教育プログラム実施にかかった事業費</p> <p>(2002年度)事業費 95,235円(消費税抜き)(東北経済産業局「地域におけるアントレプレナーシップ教育の自立的普及及び起業化人材発掘支援調査」事業費)</p>
<p>教育プログラムの効果</p> <p>子ども達に、以下のような変化がみられた。</p> <ul style="list-style-type: none">* こういう勉強がしたいという主体的な勉強意識が表れた。* 新聞を読んだり、ニュースを見るようになり、社会への関心を持つようになった。親と会話ができるようになった。また、親の仕事を理解するようになった。* 町に対する理解が深まり、観察力が高くなった。* PCの活用能力が飛躍的に向上した。 <p>参加意欲の高い子どもだけが参加していた昨年度に比べ、正課の授業になったことで、子ども達の意欲にもむらが生じやすい。これに対して、やる気のある子ども達には正課に加えて課外活動に参加させることで、彼らの意欲を生かして、ハーブの収穫や商品としてのポプリ袋のデザイン考案などに取り組みさせている。また、学校側の状況としても子ども達全員に機会提供が難しい取組や、休日登校となると代休手配や移動手段(引率)の確保などを検討しなければならず、負荷が大きいという問題があるため、課外活動としての実施と併用することで効率的に取組を進めている。</p> <p>これまで子ども達の成果の評価者は教員だけだったが、親や地域の人も様々な評価を行うようになった。また、ホームページ上での公開により評価者が飛躍的に拡大した。そして、子ども達は失敗してもへこたれずに次へチャレンジするようになった。</p> <p>2001年度から実施した「柳生小バーチャルカンパニー」で柳生和紙を取り上げてきたことから、地域での柳生和紙への理解が深まり、改めて見直されつつある。毎年旅行を行っていた敬老会では、2002年度は旅行の代わりに和紙づくりに参加した。今では、高齢者の生き甲斐となっている。</p> <p>起業教育への関心は高く、子どもに体験させたいという親や、授業を見学したいという小学校など、全国各地から問い合わせを受けている。</p>

<p>柳生小学校では、「学校を中心とした地域づくり」を目指しており、起業教育は地域づくりのための有効なツールと考えられている。そのため、教員は積極的に取り組み内容を地域へ説明することが責任として求められている。それによって教員は地域に評価される立場となり、あらゆる意見が学校に寄せられるきっかけとなっている。地域への情報発信のツールは多様である。基本は、地域全体に配布する学校便り、教員自身の P T A などでの報告の他に、「柳生子ども塾」のような地域の人に参加できる活動、マスコミ、そして柳生ネットなど多彩なツールを活用して、地域社会の評価を聞くために惜しみなく情報を発信している。その結果、教員、家庭、地域住民間の交流の垣根を低くしている。</p>
<p>教育プログラム実施にあたっての課題</p> <p>商品としてハープ入り石けんを当初検討したが、調べてみると石けんは医薬部外品に該当し、製造販売に際しては厚生労働省の認可が必要なが分かり、商品とすることができなかった。(ただし、このような問題に対する対応を子ども達に試行錯誤させることも起業教育の方針と位置づけられている。)</p> <p>起業教育の認知度が高まり、先進的な事例として紹介されるほど、マスコミをはじめとした取材が増え、特に販売実践の際には、販売に影響を与えかねない。一方、子ども達にとって、マスコミの取材を受けることが動機付けとなっている部分もあり、情報公開の方針からも地域や社会に対する広報活動と捉え、マスコミへの露出は重要との認識が関係者間に共有されている。教育現場と取材者側が連携を取り有効な関係を維持することが求められる。</p>
<p>照会先</p> <p>仙台市立柳生小学校 教諭 小熊 信治 氏</p> <ul style="list-style-type: none">・〒981-1106 仙台市太白区柳生字台畑 100 番地・TEL:022-741-6470 Fax:022-741-6471

(資料)モニタリング結果
柳生小学校資料

(出所)東北経済産業局「アントレプレナーシップ教育の普及促進による未来の東北リーダー育成実践調査」(平成 15 年 3 月)